歩いてわかる串木野麓マップ

串木野麓について

串木野麓は中世の串木野城を中心に広がっていた麓です。現在周辺の開発が進み，麓の面影は断片になってはいますが，串木野城の主要部分は残っています。串木野城は戦国武将として名高い島津豊久が生まれた城でもあり，城周辺には曲輪を利用した神社や，立派な武家住宅など，江戸の景観が凝縮されています。

串木野麓

かつての串木野城の麓に広がる武士の居住地域です。串木野郷は薩摩藩の外城のひとつで、本藩の直轄領でもありました。麓があるのは上名村であり、地頭仮屋を中心にして郷士の屋敷が整然と並んでしました。串木野郷の三役のうち郷士年寄と組頭は、長・入来・長谷場・宮之原・児玉家の五摂家が務めていました。また横目には、奥田･肝付･植村･山口･児玉・野元の諸家があたっていました。

串木野城（亀ヶ城）跡（マップ番号①）

標高約３０メートルを最高点とするシラス地形を利用した山城です。最初の城主は薩摩平氏の串木野忠道とされ、後に島津貞久の勢力下に入りました。その後には様々な勢力による群雄割拠の地になりますが、元亀元（１５７０）年に島津本宗家１５代貴久の四男である家久が、領主として入城します。島津家久は、天正７（１５７９）年に佐土原（現在の宮崎市）に移るまで、ここを拠点としており、その間に子の豊久が誕生しました。当城は、最盛期には南北２５０メートル、東西２００メートルの規模を有し、六つの曲輪群が確認されています。

薩摩街道（出水筋）（マップ番号②）

かつて、麓地区の西側を薩摩街道こと出水筋が通っていました。この街道は、薩摩藩の主要街道のひとつで、特に参勤交代等で藩主が通行する街道として多くの人々に利用されていました。鹿児島城下から伊集院や市来湊、そして串木野麓を通過して向田、阿久根、出水の野間之関を越えて熊本藩に伸びています。島津斉彬、篤姫、西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬を通行した街道でもあります。

地頭仮屋跡（マップ番号③）

地頭は串木野郷の最高責任者ですが当地に在任することはなく、掛持地頭として鹿児島城下などに通常は居住していました。ただ、地頭も年に数回は地頭仮屋に来て、その際の宿泊や政務を執る場所でした。

旧入来邸（奥田家住宅）（マップ番号④）

かつての串木野城入口前に位置し、風格ある武家門が目印。その横には樹齢３００年といわれる五葉松とイヌマキが並んでいます。入来家は入来領主であった入来院家の分家にあたります。明治期の入来定穀氏の日記は、当時の人々の生活が記録された貴重な史料です。

※個人宅であり、内部見学には事前連絡が必要。

南方神社（マップ番号⑤）

江戸期までは諏訪上下大明神と称していました。創建年代は不明で、御祭神は建御名方命など。文禄元（１５９２）年に島津義久は、朝鮮出兵に際して当社を訪れて航海の際の順風を祈願したとされています。境内は串木野城の一部でもあり、社殿周辺には土塁跡も確認できます。

石管水道（マップ番号⑥）

長家の外壁の一部として並ぶ石管水道は、かつて麓の地下１メートルのところに埋設されていたものです。設置年代は幕末から明治初期とされていて、鹿児島城下以外で石管水道が確認されるのは珍しいといえます。石管水道の長さは約１１０メートルあり、良質の井戸から麓地区まで伸びていました。石材加工は、串木野金山に関係していた串木野仕明夫と呼ばれる技術集団が関わったとされています。

長谷場純孝誕生地（マップ番号⑦）

長谷場純孝は、安政元（１８５４）年に生まれ、後に西南戦争において西郷軍として参加します。その際に地元の警察所を襲撃するなどし、三年間の禁固刑を受けます。出所御は政治活動を開始し、明治２３年に衆議院議員に当選します。その後には文部大臣も務めることになります。功績のひとつとして鹿児島本線施設などがあり、現在串木野駅前に胸像が建立されています。

岩水山良福寺跡（マップ番号⑧）

島津家久が串木野城に居城していた際に再興した寺院で、元亀２（１５７１）年に亡くなった父の貴久の菩提を弔うための廟も設置されていました。一時は蓬福寺とも呼ばれており、宗派は曹洞宗で明治２（１８６９）年の廃仏毀釈で廃寺となりました。写真はこの寺にあった大中公の廟（場所は移設）。